

# 宮崎チャレンジマッチについて

## 1 目的

- (1) 高等学校等の強豪チームを招待し、小中学生との交流イベントや招待試合を行うことで少年種別の競技力向上を図る。
- (2) 報道機関と連携・協力することで、2027宮崎国スポに向けて県民の関心を高めながら地域スポーツの振興に寄与する。
- (3) 本事業を主管する競技団体が競技大会やイベントの企画運営能力を高めることにより、組織的な選手強化体制づくりを目指す。

## 2 過去15回の概要



### (1) 第1回・・・ バスケットボール競技

- 指導者・役員・選手で279名、役員・補助員含めて、約500人弱で運営
- 入場者数が約3000名
- 宮崎県チーム（延岡学園高校）と招待チーム（明成高校：宮城県）の試合。後半に延岡学園が逆転して圧勝に終わり、その後のインターハイでも見事優勝した。



### (2) 第2回・・・ ハンドボール競技

- 指導者・役員・選手で205名、役員補助員含めて、約400人弱で運営。
- 入場者数が約1500名
- 宮崎県チーム（小林秀峰高校）と招待チーム（北陸高校：福井県）の試合。後半にリズムをつかんだ小林秀峰が23-20で勝利。昨年のバスケットボールに続き、その後のインターハイで優勝した。



### (3) 第3回・・・ ラグビーフットボール競技

- 指導者・役員・選手・補助員を含めて約500名弱で運営
- 入場者数が約1700名
- 過去2回の大会に続き、強豪の京都代表選抜チームに中学生、高校生とともに見事に勝利した。報道による効果で観客数も多く、大歓声の中で選手たちが発奮した結果と言える。



### (4) 第4回・・・ ソフトボール競技

- 指導者・役員・選手・補助員を含めて約300名で運営
- 入場者数が、2300名。第1回バスケットボール競技に続く観客数の多さ。
- 雨天のため、木の花ドームで開催したが、予定通りに実施できた。試合は、本県高校男女選抜チームが、同じく大阪府の男女選抜チームに挑んだ。女子の部では0-2、男子の部では0-3でともに敗退したが、ソフトボール競技特有のスピード感あふれる見応えのある大会となり、会場は大変盛り上がった。



(5) 第5回・・・ 剣道・なぎなた競技

- 監督・コーチ・役員・補助員を含めて約170名で運営
- 入場者数は、述べ1300名。選手役員含めて約2000人の参加。
- 大会初の2競技同時開催をした。

試合は、剣道競技で本県男子高校選抜チームと東京都の高輪高校剣道部。女子は岐阜県の麗澤瑞浪高校剣道部に挑んだ。

なぎなた競技では、「形の部」と「組手の部」で本県選抜チームが、熊本県の選抜チームに挑んだ。小学生によるエキシビジョンマッチ実施や、全国一になった本県出身の佐藤氏による剣道教室、なぎなた競技も、招待監督・コーチにより、選手・指導者含めてなぎなた教室を実施し、大きな刺激となった。

試合は両競技とも招待チームに軍配があがったが充実した大会となった。



(6) 第6回・・・バレーボール競技

- 監督・コーチ・役員・補助員を含めて約286名で運営
- 選手役員含めて約2,900人の参加。
- 1日目は2会場で県内小学生男女別バレーボール教室を実施した。高校のトップレベルの選手との交流により、今後の活動を支える貴重な体験となった。

2日目は女子のチャレンジマッチでは、本県選抜チームが大阪府の金蘭会高校チーム（春高、全国総体、国体の3冠）、男子のチャレンジマッチでは大阪府の大塚高校に挑んだ。試合は白熱したレベルの高いゲーム内容であり、本県選抜チームは善戦したが、男女ともにセットカウント1-3で敗退した。大観衆の中で大健闘した。



(7) 第7回・・・ボクシング競技

- 監督・コーチ・役員・補助員を含めて約58名で運営
- 観客数800名を含め、2日間総合計1,058名。
- 1日目のボクシング教室は、オリンピック経験者や元アマチュア世界チャンピオンによる講師で、保護者を含めて200名の参加で大盛況であった。2日目は結果として、宮崎選抜チームは6勝9敗で敗れたが、勝つべき選手は 圧倒的な勝利を収め、敗れた選手も全国上位の選手に一歩も引かない試合を展開した。



(8) 第8回・・・空手道競技

- 監督・コーチ・役員・補助員を含めて約250名で運営
  - 観客数550名を含め、2日間総合計1,100名。
  - 1日目の組手テクニックセミナーは、現役日本代表選手による講師で、保護者を含めて300名の参加で大盛況であった。
- 2日目は結果として、男女共に宮崎選抜チームが勝利したが、どの試合も接戦で、どこが優勝しても不思議ではなく、決勝戦では男女とも大将戦までもつれ入り、会場は大変盛り上がった。



(9) 第9回・・・テニス競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約200名で運営

○観客数589名を含め、2日間総合計800名。

○1日目のテニス教室は雨天のため室内コート4面で実施。招待校のメニューを行った。小中学生も監督及び選手からのアドバイスをもらい大盛況であった。

2日目は快晴となり、野外で行うことができた。結果として男子が2-1で勝利、女子が0-3で敗戦であったが全国レベルを肌で感じることができ、良い勉強になった。2日間を通して、選手強化、選手育成に大きく影響を与えたと感じた。



(10) 第10回・・・バドミントン競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約200名で運営

○観客数1,400名を含め、2日間総合計1,600名。

○1日目は県内小中学生を対象としたバドミントン教室を実施し、くまもと再春館製薬所の監督・コーチ・選手の方々に講師を務めていただき、小中学生の意欲喚起につながった。

2日目は団体戦（ダブルス・シングル1・シングル2）を実施した。男女とも1-2で敗戦はしたものの全国レベルの技術を実感でき、その後の国体では女子九州ブロック突破（本国体出場）、男子本国体4位という大きな成果を収めることができた。



(11) 第11回・・・ホッケー競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約150名で運営

○観客はコロナウイルス感染拡大防止の観点から、保護者とジュニアクラブの選手のための観戦とした。

○全国的な緊急事態宣言やまん延防止等緊急措置の中、全国屈指の強豪校である島根県立横田高等学校を迎えることができた。試合は男女ともにレベルの高い技術を見せた横田高等学校が勝利した。コロナ禍で対外試の経験の少ない本県選手にとって、全国トップの選手とプレーできた事は、とても貴重な経験となり、大きな刺激を受けた。



(12) 第12回・・・陸上競技

○県外招待選手51名を迎え、本県選抜選手47名と16種目の競技でチャレンジマッチを実施した。

○全国的な新型コロナウイルス感染拡大により、本県においても医療緊急警報が発令される中、様々な感染対策を講じ有観客で開催した。

○競技は、男子の部でトラック競技5種目中3種目、女子の部はトラック競技5種目全て中京大中京高等学校の選手が優勝し、全国トップクラスの実力を発揮した。

○本県選手は、男子では110mハードル、走高跳び。女子では走幅跳び、走高跳びで優勝し、インターハイ・国体に向けて弾みをつけた。



(13) 第13回・・・ウエイトリフティング競技

- 全国屈指の強豪校、京都府立海洋高等学校ウエイトリフティング部16名（女子3名、男子13名）を迎え、本県選抜選手13名（女子4名、男子9名）が6階級（女子2階級、男子4階級）でチャレンジマッチを実施した。
- 各種大会が続き、タイトなスケジュールの中で大会だったが、京都府海洋高等学校の選手は、実力どおり全国トップレベルのパフォーマンスを発揮してくれた。また、ウォーミングアップの取組や、試合に臨む姿勢、雰囲気作りなど、インターハイ・国体を控えた本県選手にとって、とても実りある大会となった。



(14) 第14回・・・水球競技

- 九州ではトップクラスの実力でユース日本代表候補選手を擁する沖縄県選抜と本県と同様に2030年に国スポ開催を控え、少年種別の競技力向上に力を入れている島根県選抜の2チームを迎え、2ピリオド（通常は4ピリオド）のリーグ戦でチャレンジマッチを実施した。
- 普段できない相手と対戦できたことや、前日の交流練習会で、実践しながらの練習が取り組めたことは、これからインターハイ予選、九州ブロック大会等の大事な大会を控える本県代表にとって、とても有意義な大会となった。また、昨年1月に完成したばかりの本会場では初めての大きな大会の運営であったが、今年7月に本会場で開催される九州ブロック大会、そして2027年宮崎国スポに向けて、運営の立場からも様々な視点で課題を見つけることができ、本県運営側にも大変貴重な経験となった



(15) 第15回・・・ハンドボール競技

- 令和6年度の高等学校主要大会を全て制した山梨県駿台甲府高等学校男子ハンドボール部と、2年連続国民スポーツ大会3位入賞の兵庫県神戸星城高等学校女子ハンドボール部を招待し、本県男女少年選抜との対戦を実施した。
- 男子の試合は、宮崎選抜が五分五分の試合を展開したものの、27-30で惜敗した。女子の試合では、宮崎選抜もターゲットエイジ選手の活躍があったものの21-36で敗退した。
- 男女ともに、2年後の本県開催国スポに向けて明るい材料が多く見られた試合であった。